

お釈迦様ってどんな人(下)

2001年2月10日 岡本 英夫先生

「お釈迦様ってどんな人」というテーマでのお話がこれで三回目ですね。『大無量寿経』という経典の中に出ているお釈迦様のご生涯のところを見ているわけで、このお話は今回で終わりにしたいと思います。

お釈迦様のご生涯を見る見方はいろいろあると思いますが、これは八相成道という見方です。お釈迦様のご生涯を八つの時期に分け、問題を八つ取り出して私たちの歩みに対する教としているものです。「成道^{じょうどう}」と言うのは、道が成ったという、悟りを開かれたということです。

八相成道でお釈迦様のご生涯を見てみようということですが、これには幾つか特徴があります。一つは、お釈迦様のご生涯の一つ一つの場面、例えば誕生なさったという場面、あるいは出家をされたというような場面、あるいは悟りを開かれたというような場面、そういうものが一つ一つ皆、私達に対する教えになっているということです。ですから、ご生涯全体を私達に対する教えとして受け止めていく、そういう視点で説かれているのがこの八相成道という教えですね。

もう一つ、これは面白いことなんですが、この八相成道というお話は『大無量寿経』という経典に出てきます。この経典で説かれている南無阿弥陀仏の教えを聞くものは皆、このような生涯を送る人になるのだ、というところでこのお話が出るんですね。どのような生涯を送るようになるのかと思えば、なんと、お釈迦様のご生涯がモデルになったような生涯なんですね。

ですからお釈迦様のご生涯は、お釈迦様お一人だけが送られた特殊な生涯だというのではなくて、もし人が本当に仏教の教えに出会うことができれば、皆このような生涯、このような人生を送っていくんだという、そのような位置付けで説かれているわけです。一つ一つの場面が私達に対する直接的な教えになってくるわけです。

さて、今日は最後のところです。八相というのは、経典の中で八つと決めて書かれているというわけではなくて、後の人が八つに分けたんですね。ですから分

け方によれば九つに分けている人もありますし、又、どこからどこまでが一つの相かというのも分ける人によっていろいろあるわけで、それはあまり執られる必要はないと思いますね。

一応、一番目が処天相で、これはお釈迦様が兜卒天^{とそつてん}という天の世界にあって正法、仏法を説いておられたという不思議な表現が出てまいります。二番目が入胎相、お釈迦様が「彼の天宮を捨てて神を母胎に降す」とあります。神というのは心ですね。天の世界にいたお釈迦様が心を自分の母親の胎内に置いた、つまりお母さんのお腹の中に入ったというわけです。これも不思議な表現ですね。この二つは誕生前の姿を現わすわけです。三番目が出胎相、そのお母さんの胎から出てくる、誕生相ですね。ここから事実上の人生が始まるわけです。

このように八相成道の教えというのは、誕生前に敢えて二つの相を作って人間の問題を象徴的に提起しているのではないかという感じがします。一番目が処天相ですね。天というのは、お釈迦様が居られた仏陀になる前の段階の最後、そこが兜卒天という天の世界なんだと、こういうふうに昔から言われているわけですね。天と言え、私達の楽の極みの世界、有頂天とか言いますね、あの天なんですね。

私達が生涯をあげて結局何を求めて生きていくかと言うと、楽を求めて生きていく、楽に向かってという方向で人生を送っているんだというわけですね。つまり自分という人間は何であるか、ということをはっきりと見ずに、ひたすら楽を求めていく生き方をしている。そういう生き方を超えていかなければいけないという問題が人生の全体に関わる問題としてあるわけですね。単に楽を求めていくために生きるのではなくて、本当の自分自身というものを明らかにして、本当の自分を生きていこうと、そういう生き方をお釈迦様は、生涯をあげてなさっていかれます。私達も又、同じなんだというわけです。

二番目の入胎相も大きな問題を持っています。お母さんのお腹の中にお釈迦様が自ら入る、自分の意志でお母さんのお腹の中に入っていき、と説かれています。普通、人生の始まりは、お腹から出るところから始まるわけなんですね。お腹から出て思春期にでもなれば、「どうしてこんな親から生まれなければいけなかったか」と親を恨んだりします。それが同時に自分自身を受け止められない姿ですね。不平不満が親に向かうということが多かれ少なかれあるわけです。

しかし、親を恨むこと、すなわち自分自身を受け止められないということがもし一生涯続けば、自分自身を真に十分に生ききっていくということはできないですね。ですからこの問題の解決も又、お釈迦様が生涯をあげて求めていかれたことなると。そのことを先取りして表わしているわけです。

私達も若い時には「何故、こんな親から生まれたか、何故、こんな自分を生んだのか」と親を恨むことがあります。親だけでなく世間というか、全てを恨んでいくわけですね。しかしそうではなかったんだと、親がこんな自分を生んだ、というのではなくて、じつは自分は自分の意志で自分の願いで生まれてきたんだ、というように思えることができるようになったら、そこには大きな転回があるわけです。それではじめて、この人生で、自分自身を受け止めて生きていけるようになるんだと思います。

親から生まれるわけで、親が自分を生むのですが、その自分を生む親の中に自分の方から入っていったんだというのがこの表現です。こんな親から生まれたくはなかったと思っていた親の中に、じつは自分の意志で入っていったんだというわけです。親のお腹の中に自分が入ったら、もうその親の子供として生まれて生きるしかない。つまり非常に限定されるわけです。あのような人間にもなりたい、このようにもなりたいと思っていたのが、出来ないようになって、この親の子供として生きていくしかない。その限定に私達は反発するんですね。

しかしその限定の状況の中に敢えて自分の方から入っていったと。人間の誕生というのはそのような限定なくしてはあり得ないわけで、それを自ら選び取っていったんだというわけです。その選びは人生の途中、あるいは最後に起こってくると思いますが、それを先取りして誕生の前にこのように言われるわけですね。

三番目が出胎相、誕生の場面です。面白いことが書かれています。「右脇より生じて現じて七歩を行ず」と。七歩、誕生した直後に七歩歩いたという。私達の迷いを六道、六道輪廻とか言います。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天と言いますが、私たちの迷いの姿、迷いの心、迷いの状態ですね。いろんな状態で迷っていく。一生涯ただ迷い続けるということになれば、これも又はなはだ残念な生涯です。

自分の人生はその六道で現わされる迷いを超えるためにあるのだということを表わすのが「六」を超えるという意味の「七」なんですね。七歩を歩くと。そして、声を挙げて自ら称す。どのように声を挙げて言ったかと言えば、「天上天下唯我独尊」と言われました。他の訳し方で言えば、「我れ、世において無上尊となるべし」と。この二つは同じことを言っているんですね。訳し方が少し違う。

「天上天下」は「世において」ですね。「唯我独尊」は「唯、我れひとりにして尊し」と読みますが、それが「無上尊となるべし」ですね。ひとりひとりの人に本質的なところで何かを付け加えたり引いたりする必要がなく、その人はその人だけで無上尊なのだ。この世においてもっとも尊い存在なんだ。他人と比べてこの人は尊い、この人はそうでないと言うのではなくて、皆がひとりひとり尊い、これ以上のない尊い存在なんだ。そのように自覚できる存在となっていくんですね。

言い換えましたら、自分はこの世にこのような自分として生まれて、本当によかったんだと言えるようになります。もし、自分のあそこがもっとこうであれば、ああであればよかったと言うのでなくてですね、これで本当によかったんだと言える。人間とはそういう存在なんだ。そして、私たちもそのように人生を生きていくのだというのが、お釈迦様が誕生された直後の宣言の内容であったのです。

ですからある意味で、誕生直後にお釈迦様は人間としての一番基本的な問題点をテーマにあげて、それこそ精進目標をあげましてですね、一生涯かけてこれを成就するぞと、そういうことなんですね。これが一応三番目ですね。

四番目は成長期にあたります。名称も人によっていろいろな呼び方がありますが、処宮相とも言います。宮は宮殿です。当時のインドは沢山の国に分かれていて、お釈迦様はその一つの国の王子様でひとり息子だったんですね。ですから十代前後、宮殿に処して即ち恵まれているんな勉強をしたり運動をしたりするわけです。それらが自分の人生に一体どんな意味を持つのか、ということが問題になります。その意味合いを分けるのが出家ということです。

五番目が出家相ですね。この出家のところが一つ大事になってくるところです。出家というのは、自分自身から出るという意味ですね。出家の直接のきっかけになった、あの有名な四門出遊という出来事があります。お城に東西南北四つの門

があって、ある時お釈迦様が外に出られます。お釈迦様は誕生の時の占いによると、将来出家をする相が出ていると言うことで、お父さんの国王はいつもそれを気にして、出家のきっかけになるようなものは周囲から避け、そのような経験もできるだけさせないようにという配慮をしてきたわけです。

しかし、お城から外に出るとなれば町の中に行くわけですから、何がそこで起こるかわからないですね。それで町中に命令を出して、出家の動機となるような病人はいたらいけない、死んだ人がいてはいけない、花が萎^{しぼ}んでいてはいけないなどと、いろいろな命令を出して万全を期すのです。

ところが、東の門から出ていった時に老人に出会います。「人は皆こうなってしまうのか」と。こうなってしまうにもかかわらず皆はそのことを考えずに夢を見るように浮かれて生きているのではないかと、人間の現実につづかるわけですね。南の門から出ると病人に出会い、西の門から出ると葬式の列に出会う。こうして老病死、常ならないこの世の現実を見るわけです。

あの老人や病人や死んだ人というのは実際の人ではなく、いわゆる仏教を守る天の神々が老人、病人、死人に姿を変えて出るんです。お釈迦様は必ず出家をして将来仏陀になる人だからと、出家するように誘うんですね。それで結局、誘われて出家してしまうのです。父親の人間的な愛情や配慮より、仏陀の出現を待つ全人類の願いの方が勝ったということでしょう。

自分がこれまで身につけていた王子としての冠や飾り物、服、馬、それらを全て捨てて一人で山に入っていく。ですから出家相が教えるものは、私達も又、まず自分との闘いに出発しなければいけないということだと思えます。その意味合いでは、出家ということは生涯続いていくものではないかとも思われますね。

もし処宮相までで人生が終わっておれば、自分というものを本当に知ることができないで人生が終わってしまうかもしれません。そうすると、処宮相、即ち、自己を精神的にも肉体的にも鍛えた意味はどこにあるかが分からなくなります。何のために勉強をし、何のための強さであるのか。出家をし、真実を求めていく、そのような人生を送るために精神と体の強^{きょうじん}靱さが大きな意味を持つてくるのです。逆に出家のない人生においては、学ぶことの意味が忘れられ、誤解され、健康が、ただ健康であること自体に意味があるような健康信仰で終わってしまうので

しょう。そして、出家というものがあつたがために、六番目以降が展開してくるわけですね。

六番目は、悟りを開く時に魔を降伏さすので降魔相ともいいます。魔というのは西洋で言う悪魔とは違い、私達の心の中にある煩惱のはたらきです。

出家をして真実の道は何かと求め始めると、我が内なる煩惱というものが魔のようにはたらいてきて、私の歩みを邪魔しようとするわけですね。その魔をついに降伏さす。魔の方がまいったと、こういうふうに言わせるんですね。それで悟りを開く。悟りというのは、ここでは正覚という言葉で言われます。これが降魔相ですね。

今日は、七、八番目を見ていくつもりです。七番目が転法輪相です。法輪というのは仏教の教えのことです。この転法輪相がお釈迦様のご生涯の一番中心部分です。文章の量から言ってもほぼ半分近くを占めています。ここにお釈迦様のお釈迦様たる所以の歩みというものがあるんだと言うわけですね。この教えによって、人々を教化していくわけです。そういうことがずっと述べられます。

最後は亡くなられることについてです。それを入涅槃相ともいいます。八番目です。涅槃に入られる。涅槃という真実の世界にお釈迦様は帰っていかれる。人々は嘆くんですよね。何故、お釈迦様が亡くならなければいけないかと。しかし、お釈迦様が亡くなっていかなければいけない大事な意味があるんだということが、ここで一つの教えとして説かれてくるわけです。そのようにして一生涯のことが述べられていくんですね。

六番目の降魔相ですが、このような文章で述べられます。「哀れみて施草を受けて仏樹の下に敷き跏趺^{かふ}して坐す」と。お釈迦様は出家して山で六年間大変な苦しい修行をされます。

お釈迦様が出家をして山に入って修行しようと思われた動機は、自分個人の迷いを超えていこうということだったんですね。しかし、実際にそれをやってみて明らかになったことは、自分個人の救いの行というものにはできないんだというか、完成しないというか、もっと言えば、そのような行はそもそもあり得ないんだということです。

それは、いくらやってもやっても自分個人の救いを求める行というものは徹底できない。何をなすべきかと言えば、自分も又、人々と同じ存在であり、同じ人間であって、結局煩惱に満ち、迷って生きざるを得ない存在だと。そういう人間だと。だから、そういう自分が自分だけを皆から切り離して、自分だけ救われていく道はないんだということに気づくのです。

はじめは自分一人の修行のために山へ行くわけです。世間の中にいたら騒々しいからできないんですね。だから、世間から自分を断ち切って行くわけです。しかし、それは間違いであったんだ、あの世間の人達と自分とはまったく同じ人間だったんだと。

だから、皆が救われていく道を私は求めようというように大きく方向転換して、山から下りて皆の中に入って行くわけです。そして身体を洗う。これまでの歩み方を越えたのですね。川から上がって、皆が救われる道が私自身も又救われる道だと考えて、一本の樹の下に坐って瞑想を始めようとするんですね。

お釈迦様はその樹の下に坐ろうとなさる時に一人の青年が、川から上がってやって来られるお釈迦様の姿をずっと見ていて、この方は将来悟りを開かれて仏陀になる人に違いないと感ずるんですね。

基本的なことですが、仏陀というのは、Buddhaの訳です。訳と言ってもBuddhaを発音で訳しているだけですから、この漢字の文字に意味はないんです。仏陀というのは、もし強いて意味をとれば覚者と言います。この基になる言葉がbudhです。なかなか的確な日本語はないんですけど、分かりやすく言えば、覚、めざめる、ですね。仏陀は目覚めた人です。

目覚めるということの内容は、何と言っても自己自身に目覚めることです。私たちは自分自身を生きていて、その自分自身が何であるかがよく分らない。自己自身が分からずに生きていくという空しさがあります。充実して生きていくには、生きていく自己自身が何であるかを明らかにして生きていくということではいけません。

もう一つは、真実なるものに目覚めていくということです。目覚めると言っても、自分で自分を考えて目覚めるというわけにはいかない。目覚めさすものがな

ければなりません。自己が何であるかを目覚めさすもの、これが如来です。仏様。今は、阿弥陀仏という仏様。一般的に言えば真実なるものですね。これらに目覚めていくことが私たちの大問題なのです。

青年はお釈迦様のお姿を見て、この人はやがて仏陀になる人に違いないということを感じるわけです。青年は草を刈っていたんですが、自分が刈ったその草をお釈迦様に、どうぞこの草を敷いて座って下さいと差し出すんですね。その草というのは、どのような意味を持つのか。この青年の願いを表わすのでしょうか。いや青年だけでなく私達すべての者の願いを表わしているわけです。

この時点で、お釈迦様は、まだお釈迦様、即ち仏陀になっていません。しかし遂に仏陀になったのです。自己と真実に目覚められた。私達もまた誰しも心の底で目覚めたいという思いを持っています。しかし、私達を目覚めさせるための教えを説く人がいない。最初の一人がいないといけないんですね。その最初の一人にお釈迦様になる予兆をこの青年は感じたのです。そこで、もしあなたが仏陀となられたら、どうか私達全人類に、目覚めていくための教えを説いて下さいと願ったわけですね。このような願いを草に託してお釈迦様に差し出したのです。

お釈迦様はそれを受け取って、跣踏します。跣踏すると足がベタッと草に着くわけです。青年の願いに密着したのだと解釈される方もあります。要するに、お釈迦様は青年の願いを聞き入れるわけですね。

そこで次の場面です。「大光明を奮い魔をしてこれを知らしむ」と。文章は飛んでいる感じがしますが、お釈迦様が坐って瞑想して万人の真実とは何かと考え始めた途端に、魔が現われてきたんですね。魔というのは、さっきも言いましたが私達の煩悩のはたらきですね。煩悩というのは簡単に言えば、煩は身を煩わす、悩は心を悩ます。私達の心身を煩わせ悩ますものです。自分が本来生きていくべき道というものを行かせないのが煩悩です。三大煩悩が貧欲、瞋恚、愚痴ですね。いろいろな煩悩が根っこにあって、お釈迦様が悟りを開いていこうという歩みを邪魔してしまおうとするのですね。それを今は魔と表わしています。

その魔に対してお釈迦様は何をなさったかが問題です。この前の段階では、山で苦行をしました。魔に勝とうとしたわけです。しかし、できなかった。いよいよ

よ煩惱の存在であることを知らされただけに終わったんですね。今度はその魔に対するのに、「大光明を奮い」、つまり光明を放ったんですね。これは一口に言いましたら、大乘の願いに生きることを魔に対して宣言したのです。

大乘の願いは、私達全ての者が真に平等に救われていくことへの願いです。人は皆、人であるということで同じ存在ですから、その私達全てが救われていく道を私は求めていくんだと。そういう大乘の願いに生きることを宣言したのが、大光明を放つ、「大光明を奮う」ということなんです。これによって、やっと魔を降伏することができました。

魔というのもいろいろ言われるのですが、魔の十軍という押さえ方があります。十軍というのは魔は十通りの軍隊として現れるということでしょう。一番目はぎよくよく楽欲、楽をしたいという思いですね。二番目がその逆の不快。不快な状態を避けたいと言う思いですね。辛い事、心身の苦痛を避けたい。三番目に飢渴、何かをすると(道を求めると)食べていけなくなるのではという思い。四番目は渴愛。道を求めていく時に愛情や家族の方が大事ではないかと言う声ですね。五番目は懶惰。怠ける心です。六番目に怖畏、おそれですね。いろんなことが恐くなる。七番目が疑いですね。本当にこの道でいいのかと。八番目が虚栄と剛情。一つの心の裏表でしょう。共通していることは、裸にならないこと。九番目は名利心。十番目が自讃毀他。自分をたた讃え、誉め、人をそし誹る。

このような思いが、自分の本来行く道を邪魔するようにしてはたらいてくる。この十軍というのは、もちろん自分自身の心なんですね。自分の中にあるこのような煩惱というものが自分の心に覆いかぶさり、歩みを邪魔し、打ち負かして、魔のようにはたらいてくるということなんですね。

この魔に対して大光明を放つ。大というのが、大乘を表わしています。又、大というのは公なんです。公的の反対が私的ですね。大乘というのは私的な道でなくて、本当に公の道、万人の道ですね。その万人と共に歩いていく。万人が救われていく道を行くんだと。万人が救われていく道を求めるというのが、人の本来歩いていく道なんだと。その大乘の道が、本当に理に叶った私達の歩みですから、魔を降伏させることができるんです。自分だけが救われればいいとなったら、それ

は本来の道ではありませんから、魔に付け込まれる隙が一杯あるというわけですね。

お釈迦様は、魔を降伏させることができましたから、そこで正覚を成ずることができたわけです。正覚を成ずる時に最正覚を成ずると、こういうように表現していますね。お釈迦様が至ることができた悟りというものは、悟りの中の最高のものであると。最高の質の悟りであると、そういうふうにはまず最初は押さえていくんですね。

その時、お釈迦様は三十五才ですね。八十才で亡くなります。その後、四十五年間、お釈迦様が教化をしていく、法輪を転じていく一番中心の期間です。その四十何年間かを通して、この悟りということがずっと問題になって、遂に悟りの質が変わっていくのです。最後は、等正覚という悟りを開かれますね。この等しいというのが真に仏法と等しく、従って人々と等しい、言い換えれば、どんな人に対してもピタッと合った教えが本来の仏法ですから、そのような教えを説くことができるようになった。お釈迦様は四十何年の教化の歩みを経て遂にここまで来る事ができたのです。

私は以前、お釈迦様は三十五才で悟りを開かれたというのは分かりましたが、それ以降、八十才までは何をされていたのかなというような疑問があったんです。ずっと教えを説かれたというのは分かるけれども、お釈迦様自身はどうだったのかなとね。お釈迦様とはどんなイメージかと言えば、完全無欠で、何が起っても動揺しないような、ある意味でいつも無表情のようなお方ですよ。そうだろうとは思いますが、一寸分かりにくかったですね。

しかし、お釈迦様ご自身はですね、生涯ある意味で大変厳しい歩みというか、自分自身の課題を持って歩み抜かれた人でなかったかなという感じがします。感じがするだけはいけませんけれども、一つは悟りの内容が変わられたということがあります。お釈迦様の開かれた悟りは、この上ない最高の悟りであったと。

それは開かれた悟りの質ですね。今度はその質の中で更に歩いて、本当の悟りというのはどんな人に対しても、それぞれのどんな歩みの段階にあっても、それにピタッと合った教えを説くことができる。四十数年の歩みで遂にそこまで行かれたのです。

誕生直後にお釈迦様が七歩歩いて、天上天下唯我独尊と言いました。それを言った時に、大地が震動して光りが満ち溢れたという表現があります。これは、この課題をお釈迦様は一生涯をかかってやり遂げるのだということなんですね。六歩の迷いを超えていくのが人生であり、我まさに世において無上尊となっていくというのが人生なんだということを誕生直後に明らかにされたわけです。人生の出発点において明らかにしたんですよね。その時に大地が震動して光が溢れたということは、全世界が、お釈迦様の言ったとおりなんだということを証明したわけです。それはしかし、お釈迦様の誕生直後であって、それを実際、八十年の人生で実践していくというのがお釈迦様の仕事なんです。そして、それが遂にできたんです。

お釈迦様は、それまでの迷いから遂に悟りへ至られて、更に悟りの内容を深められて、遂に等正覚まで、本当に実質的にこの上ない悟りに至られた。そして、この等正覚を開いた時に、大地が震動し空中が光りで満ち溢れたという、先ほどの誕生直後の同じ表現がもう一回出るんです。これは実際に、その人生の課題を遂に克服したんだということ、その極みの姿なんだろうと思いますね。悟りというものもそのように進展していくと言いますが、深まっていくわけですね。そのような歩みをお釈迦様は長い間かかってなさっていかれたんだということです。

少し前後しましたが、草を刈っていた青年がお釈迦様に要請します。もしあなたが悟りを開かれて仏陀になられたら、私達にもその教えを説いて下さい、と。それに対し、お釈迦様は、よし分かったと言うわけですね。それで瞑想して遂に悟りを開かれた。

ところがお釈迦様は、その教えをなかなか説こうとされないんですね。何故かと言えば、悟ってみればですね、自分が悟ったその内容は私達に教えを説いて下さいと言っているその人々の我執を否定する教えだと。しかもその人達が皆、その我執を自分にとって一番大事なもの、我が命として生きている。その一番大事なものを自分が悟った法は否定をするのだと。

だから、人々は説いてくれと一応言っているけれども、もし自分が教えを説いたら、その教えは人々を否定する教え、お前は根本から間違っているぞというよ

うな教えですから、人々はもう結構ですと言って逃げるに違いない。そのように思われて、お釈迦様は説くのをやめるんですね。

しかし、一旦はやめようと思われるんですけども、その時經典によれば、不思議なことが起こります。天人が現われるんです。天人が現われてお釈迦様にお願いをするんですね。もう一度、考え直してほしいと。そしてお釈迦様も考え直して、そこでやっと教えを説き始めるのです。

天人というのは經典に時々出ます。大変面白い場面で出て、大事な仕事をするんです。天人というのは、そのような人がいるというのではなく、私達の真心というようなものではないでしょうか。私達人間の本心なんです。真心というか本心。それは、自分自身にさえ気づいていないような本心なんです。それは何かと言ったら、真実の教えに遇いたいという強い願いを私達は持っている。けれども、その願いを自分でもどう現わしていいかわからないんです。場合によれば、真実とはこうなんだぞと人が言ってくると、いや結構ですと反発をしてしまうわけですね。けれども自分自身の一番奥の心は真実を求めている。その一番奥の心を天人で表わすのです。

ですから、お釈迦様が説くのをやめようと思われたけれども、私達の本心、一番奥の心は、どうか説いて下さいと。我執を我が命としているけれども、本心は違うんだと。本当は真実に出会いたいんだと。だからどうか説いて下さいという私達の心の底からの要請ですね。これを天人で表わして、天人がお釈迦様のところに行ってお願いをする描写になっているんですね。

仏教の教えというのは、ごく普通の感覚で言えば、私が気づいた時には、もう既に教えの方は先きにあるわけですね。それで教えを聞かないかと勧められても、よけいな世話ですということになって、私とは関係ありませんとなります。私はそんな事、頼んでいませんとよと、このようになりやすいんです。けれどもこのことが教えるのは、本当の教えを説いてほしいとお願いしたのは誰かという問題ですね。それはやっぱり私自身だということではないかと思えます。私という存在は、この教えがなければ本当に目覚めていくことができない、生きていくことができないと。自分という存在が教えを要請しているんだと。だから、お釈迦

様に説いてほしいとお願いをしたのが、正に自分自身なんだと。先程の草を差し出したあの青年、あれが又、私自身なんです。

さて、お釈迦様は成道以後ずっと教えを説いていかれるんですが、それが七番目、転法輪相ですね。法輪を転ずる。ここは文章も多いところですが、基本となるようなところを見ておきましょう。

お釈迦様は人々に対しどのような基本姿勢で教化していかれたか、それについて次のように言われます。

「法鼓^{ほうく}を^{たた}き、法螺^{ほうら}を^ふき、法剣^とを^とり、法幢^{ほうどう}を^たて、法雷^{ふる}を^{ふる}い、法電^{かがや}を^{かがや}かし、法雨^{のぼり}を^{そそぎ}、法施^のを^ほべ、常に法音^もを^も以^もって諸々の世間を^あら^しむ。」

この中、初めの四つは戦争の行進の姿をあらわします。太鼓を叩き、ラッパを吹き、剣をとって、幟^{のぼり}を立てていく。もちろん法の戦争です。即ち、お釈迦様のご教化は、けっして簡単なものではなく、人々との闘いであったということでしょう。

先ほど申しましたように、人は皆、我執の存在、自我というものを基にして生きています。その自分は真実の間違いのない自分かといえはそうではない。煩惱の満ち満ちた自分なんです。しかし、いかに煩惱が満ち満ちていようと、真実の心がなかりとも、なんと言ってもそれが自分ですから、どんな自分であろうとも、この自分が一番大事であり一番可愛い、そこにまさに自分自身としての落ち着き、自己自身であること、があるんですね。ですから、その自分を第三者から否定されたら、これはもう大変です。喧嘩になります。それが人間なんです。お釈迦様が今から教えを説いていこうという、その相手の人は皆そのような人ですから、その人が持っている我執の心と、お釈迦様が説く教えとの闘いなんですね。

仏教の教化のあり方が闘いの行進の姿で表わされることは、大変大事なことだと思います。まず、仏教の世界というのは、教えの方から私の方へ進んでくるといふ動きが基本である、ということです。もちろん私自身も求めていくということがあります。しかし、その私の歩みがあるから仏法を得ることができるのではない。

私自身はどこまでも我執の深い存在。その私が私自身へ向かってなすべきことは、最終的には、我執の存在であることをお詫びしていくことです。我執の存在が真実を求めたからといって、それだけで求まるものではありません。もし求まるとすれば、真実の方が私のところへやってくるからです。その真実の私へ向かっての動きが、今闘いの行進として表わされているのだと思います。

次に、それはまた、私自身における闘いだということです。私自身の昔のことを申して恐縮ですが、私が仏教に対して反発の心を持っていた理由の一つが、仏教をやっている人は、ただ念仏だけ申して何もしていない。じっと待っている受身の姿勢だ、ということでした。ところが実際に少し触れてみるとそうではありませんでした。仏教の歩みというのは、教えによって我が身を照らされて自己とは何かを知らされ、現実を受け止めていくなかなか厳しく、自己との闘いの要素が非常に強いものでした。自分ひとりで閉じこもらず、仲間と心を打ち明けあい、励まし支えあって歩いていくものだと思います。人間はどこまでも「間的存在^{あいだ}」だだと思います。

そしてもし、歩みの途中で何かを見失い、力が出ず、友とも離れがちになってきた時に、このお釈迦様の法の軍隊の大打進を憶えばいいのです。二千五百年に渡る仏教の歴史の人たちが、お釈迦様を先頭にして、龍樹も天親も曇鸞も善導も、そして親鸞聖人も私の先生も友も、阿闍世も提婆も韋提希も、皆が、私に目を醒ませよと太鼓を叩き、このような真実の法があるぞと法螺を吹き、鋭い教えの剣をとって私の迷いを断ち切ろうとされ、ここに道があるぞと幟を立てて、私の方に向かって大打進をしてくる、それが歴史の本当の意味なんだと、それを受け止めて、奮い立っていくことができるのです。

そのようにして再々にわたって頂く教えが、私にとっては法雷と法電とあるように、私の近く、また頭上に雷が落ち、稲光が目くらますほどに輝き、眠っている私を目覚めさせていくのです。目を覚ましてみれば、自分の方こそが間違っていたんだとわかる。そこに初めて教えというものが、その人に届くんですね。それが法雨をそそぎ、法施をのぶです。このようにして教化というものが続いていくわけです。

ところで、『阿弥陀経』という經典に、お釈迦様ご自身のこんなお話があります。お釈迦様がずっと教えを説かれて、たくさんの仏法者が誕生したんですね。お釈迦様は誕生した仏法者を誉めるんです。皆さん、それぞれ素晴らしい仏法者であると。そうすると仏法者達もですね、今度は逆にお釈迦様を誉めます。自分達の先生を誉める。どのように言って誉めるかと言えば、あなたは本当に為し難い事、「甚難^{じんなん}」という表現で言われていますが、甚だ難しい、本当に甚難な事をこの五濁悪世の現実世界において、つまり為し難い事を為し難い場所において、その世界を生きる私たちに対してあなたは、仏法を勧め続け説き続けて、本当に大変なことをなさったと。五濁悪世とは私達のこの世界です。

煩惱によって私達の考え方も社会全体も皆濁ってしまっているのがこの世界です。

『阿弥陀経』は、舎利弗という仏弟子に説いているのですが、その舎利弗に「舎利弗よ、そのとおりなんだ。今、たくさんの仏法者が自分の事を言ってくれたように自分の生涯というのは本当に甚難な一生涯だったんだ」と言われる場面があります。お釈迦様という方は何かもう悟りを開かれて、完全無欠で何の苦もなく問題もなく、その後の生涯を送られたのかなという感じもしますけれど、そうではなくて、本当に辛い厳しい道を歩まれたんですね。自分が教えを一言説けば、相手がすぐに分かったと言うようなものではないんですね。皆、反発するものを我が内に持っているんです。そういう人に対して、闘いを挑むようにして教えを説いて、遂に目覚ましめてゆく、本当に大変なことを自分は何十年と為してきたんだということです。

このことによって遂に最後は、悟りが等正覚になったんです。さっき降魔相のところ魔を降伏して最正覚を成ずるところがありました。それ以来、生涯をかけて遂に等正覚までやってきた時に、かつての魔に対して今度は表現が変わって、帰伏をさせるのです。降伏が帰伏になったんです。降伏は、魔がお釈迦様に対して「まいった」と言うわけですね。しかし、「まいった」という言葉はどこまで信用していいのかよく分かりません。「まいった」と言いつつ、チャンスがあればひっくり返してやろうと思っているかもしれないですね。

お釈迦様は、最初に開かれたその悟りでもって魔を押さえ付けること(降伏)ができたんです。しかしある意味で、魔はまだ生きています。その魔が、遂に等正覚までくると帰伏します。帰というのは帰依するんですね。帰依するというのは自分の本来帰るべきところへ帰るわけです。魔がお釈迦様のところへ帰ったんです。だから初めは真実の道を歩むお釈迦様を邪魔するものとして動いていた魔がお釈迦様の歩みに添って生きる者となった。だから、もうお釈迦様は魔を押さえ付ける必要がないんです。魔の方が魔の方から自分の助けをしてくれるのです。

さっき煩惱のところで、貪欲ということを行いました。これが私達の煩惱の一番親玉のようなものですね。自己中心的な欲です。この貪欲が貪欲のまま生涯続きましたら、それは大変なことになりますね。しかしお釈迦様の歩みから言いましたら、先ほど魔を降伏させた段階では貪欲を押さえ付けていたんですが、帰伏するようになったということは貪欲の質が変わったのです。

欲生という言葉が仏教にあります。欲生というのは言い換えれば、願生と同じような意味で、真実を求めて生きていこうという願心です。願いですね。それを欲生とも言います。文字の上で考えてみれば、貪欲の欲、自己中心的に自分の欲しいものをどんどん欲するというその欲が、欲生という真実を求めていこうという願いに変わるんです。「何々したい」というのが欲ですね。この「したい」というところは変わらないんですが、したい内容が変わるんです。自己中心的に全てのものを自分のものにしたいという欲が、真実を求めて願いを興して生きていきたい、に変わるんです。ですからもう魔を押さえ付けておく必要がない。そうなったところに本当の自由という、本当に自らに由るといえることがあるのではないかと思います。

さて最後になりますが、八番目、入涅槃相。涅槃に入るところですね。真実の世界にお釈迦様は帰っていかれる。この入涅槃相は意味を取ってみれば大きく二つありますね。

普通は死亡したと言いますね。死亡というのはなかなかの言葉ですね。死んで亡くなるんですから。しかしお釈迦様は死んでも亡くならないんです。どこにい

るかと言えは涅槃の世界にまします。私達は皆、生涯を終えていくことによって涅槃の世界に至るといふ、そういう意味合いがこれは当然のことながら一つあると思いますね。

それからもう一つ、痛烈な意味合いがここで教えられてあろうかと思うんです。お釈迦様という方は、お弟子達にとっては大変な先生であったんですが、先生とは去っていく存在なんだということです。いつまでも弟子の前にはいないと言うわけです。それは当然ですね。弟子にとって先生がいつまでも居れば、やはり先生に頼る。自分が独立できない。弟子の前に、その前途に立ちはだかるようなそういう形で居てはいけないんだということがあつたわけですね。それで自ら姿を隠す。そうすると残された者は大変ですから、本当に自分達が自ら奮い立ってこの道を明らかにして歩いていかなければならぬ、となつてくる。初めてそこで主体的な歩み、独立ということが問題になつてくるわけですね。そういう最後の大事な仕事をなさる。それが自ら去っていくというわけですね。

これと同じ主旨ではないかと思うんですが、歎異抄の第二章に面白い表現があります。歎異抄の第二章というのはどういうことが書いてあるかと言いましたら、親鸞聖人が二十年間関東で教えを説かれて、六十才を過ぎて京都へ帰られます。その後京都へ帰られた親鸞聖人のところへ、はるばる関東の人達が尋ねに行くんです。その尋ねに来た人達に対して親鸞聖人がお答えをなさる、そういうやり取りが述べられてあります。

皆の問いが、本当に南無阿弥陀仏と念仏するだけで大丈夫なんですか、本当にそれで救われるんですかということなんですが、親鸞聖人は、その通りなんだということを自分の場合はこうであつたといふところで応えていられるんですね。親鸞聖人の先生は法然上人です。親鸞聖人は二十九才から三十五才までの六年間、法然上人の門に入って弟子として大変な教えを被って、南無阿弥陀仏の眞実の世界に遂に出ることができたんですね。

その法然上人のことを親鸞聖人がどう言つたかと言えは、法然上人がたとえ弟子である自分を騙したとしても、自分はなんの後悔もないんだということですね。先生が自分を騙すといふ問題を想定しているんです。実際に法然上人が親鸞を騙すといふことはまずなかつたでしょう。それなのに何故親鸞聖人は先生が自分を

騙すというような、ある意味では突拍子もないようなところで言おうとされるのか。

それについて思うのは、騙すというのは、例えば分かりやすく言えばこういうことを考えてみるといいと思います。六年間、法然上人は親鸞聖人を教えるんですね。

そして、法然上人のお弟子は、三百人、四百人といいますが、親鸞聖人はその中でも事実上のナンバーワンと言っていいほどになっていけます。本当に自分の言わんとするところをよく分かってくれている弟子なんです。それで六年経って、事情があって別れる時にですね、法然上人が次のように言ったと想定してみてください。「今まで六年間お前に教えを説いてきたけども、あれは全部嘘だったんだ」。俺は六年間お前を騙してきたんだと、このような場面を下地に考えてみると分かりやすいと思います。

何故、親鸞聖人が「たとえ騙されても」と言われるか。それは、法然上人が明らかになさった念仏の教えが、六年間の教化によって親鸞聖人に明らかに伝えられ、念仏の教えによって本当に救われたのです。そのことはもう間違いがない。そうってみれば、その後、法然上人が、いやあれは間違いだったんだといくら言っても、この教えについてどう言われようとも、私はなんの問題にもしません。法然上人のところで明らかになっていた教えが遂に自分のところまでやってきて私を救いました、もう間違いはありません、ということでしょう。そのことを明確に表現するために、たとえ法然上人に騙されてもというような想定の仕事方をされたのでないかなと推測されますね。

あそこで親鸞聖人が問題とされたことは、自分の先生とか先輩とかそういう方が私に教えを説いてくれますが、私自身がその教えを本当に頂くということが一番大事なんだということですね。次なる者が本当にその教えを受け止めていくのが大事ですね。それが仏教の歴史が伝わっていくということでないかなと思います。

お釈迦様の場合も、生涯をかけて一生懸命大変な状況の中を教えを説き抜かれたのです。今度は弟子達の番なんです。お釈迦様は教えを説かれた、お釈迦様は素晴らしい方だ、で終わってはいけないんです。その教えは次なる者に伝わっ

ていかなければいけない。伝わらなかったら、もうお釈迦様を見殺しにするようなものですね。伝わっていかなければいけない。

ですから、お釈迦様が最後に弟子の前から姿を隠すというのは大仕事なんです。これによって教えは次なる弟子達の上に成就する。いやもしかすると成就しないかもしれません。しかし、成就是少なくともこうしなければあり得ないというので自ら去っていく。だから亡くなっていかれるということには、そのような教えとしての大事な意味があるのです。

少し駆け足になりましたけども、一応この三回で、極めて不十分でしたけれど、八相成道の教えに基づいてお釈迦様という方を見てきました。この次は、少し違った角度から、広い意味でお釈迦様について述べられていることを取り上げたいと思っています。初めての方もたくさん来ていただいてお聞きくださり、有り難うございました。